

氷川瑣言

比路志生

減私奉公

減私奉公と言ふ言葉も随分古く言ひならされて別に吾々の耳朶に新しく響かないが此は、何時の世如何なる時であつても尊重し又實行しなければならぬ、一切の公事を行ふに當り苟くも私情を交へるが如きことがあつてはならぬ、人の罪を裁判するにも公正無私でなければならぬ、私の感情や行擧りに捕はれるが如きことは嚴禁すべきである。官廳でも公衙でも銀行でも統制會などでも公私の區別はハッキリとせねばならぬ、便箋や封筒や用紙類の如き公私のけぢめがあらねばならぬ、時間でも勤務時間中に私用を便するが如きは慎しまねばならぬ、町會でも配給の事と町會自身の仕事を混同してならぬ。とかく日本人は公私の別を明かにせぬ缺點がある。大東亞共榮圈建設の責任を負へる今日特に此公私の區別を明確にし減私奉公の實を表現することが何よりも

大切である。

主食は米

何んと言ふても日本人は米なくては生活し得られない。米に執着を持ちつゞけることが何で無理であらうか、日本人の胃腸は米に馴らされて居ること神代天照大神の時代より此方三千年以上である。三千年以上に渉る習慣を反省せねばならぬとは無理なる要求である。

何事ぞ農村の行詰りを唱ふることよ。農村の行き詰りは米作偏重に原因するものゝ如く解するは非である。他に其主たる原因の存することを知らざるの致す所か妄りに國民常食の米を節せよと唱ふ、いわれなき言は甚しき愚である。吾人は寧ろ米を多作して多食せよと言はんとす。節米に反省せよと要求せられずとも已むを得ざる場合は玄米は愚か糠麥でも諸類でも乾麵でも大豆でも玉

蜀黍でもあればあるに従ひて主食分として之を食として居る、
 豊かならざるも食ふに足る丈を確保してもらへば満足する。反省
 を求めらるゝよりは此の方の供給に勉めらるる事が緊要事であら
 う。

週報

情報局の編輯に係る現在の週報は一口にいへば困苦しい。これ
 は國家施策の解説を目的としてある關係上やむを得ぬことかと
 も思はれるが、餘りにお役所型で親しみ難い感がある。もう少し
 くだけたものを望む、くだけるといふのは俗悪化を意味するもの
 でないと言ふ者がある。實に同感の至りである。もつと趣味の豊
 かな書き振りが出来る筋合である。筆を執るものがとかく義理と
 か職務とかにこだわらすぎると此の弊が生ずる。今少し自己の天
 分に生きる途を考へ執筆すればよき書振が出来ると思ふ。

犠牲の均等化

二億國民の總力結集が今こそ最も切實に要望される所以のものは
 實にこゝにある、之れには犠牲の公平が嚴格に保たねばなら
 ない。われ、人共に均しく君國の爲めに惜しみなく凡てを捧げなけ
 ればならない。權力の有無によつて、乃至は財力の多少によつて
 各人の犠牲の度合に假りにも差等があつてはならない。|| 寡きを

患へず、均しからざるを患ふ|| いみじくも孔子は喝破したものでか
 なと思ふ」とは日本郵船會社調査課長松隈國健氏の意見である、
 共鳴もし同感でもある。負擔にしても配給にしても事の公平均等
 を希ふものは國を強かしめんと欲しての願望である、總力の増強
 を圖らんとするの祈願である。戦ひぬかんとする吾々國民が心からガ
 ッシリと組み合ひ、とけ合ふて一體となつて一つの火の魂となつ
 て敵に當るのには是非とも犠牲の均しくあることを緊要とする、
 切實とする。犠牲均等化、之れが最も重んぜらるゝは故なきこと
 ではない。

文句の是非

五月十九日第三四四號週報に「物資動員計畫問答」と題して登
 載されて居るが其の内に「結局日本國民の戦争遂行の意思力によ
 るのであつて、意思の薄弱な者には足りないのだし、意思の強固な
 者にはこれでも足りる。戦争をやつてゐるのだから、もつと少く
 てもやつてゆけるといふことになる」との言葉がある、此の文句
 は解しやうによりては無理解な注文のやうにも聞へる、例へば米
 が足りないのは各家庭に於いての事實である、如何なる意思力の
 ものでも事實を無視し米が充實して居ると事實に反した認識は不
 可能であるから斯様な無理解な注文をなざるゝ筋合のものでない
 ことは明かであらう、唯文句の上では如何にも無理解のやうに思

はるゝのである。然し物資の不足に對しての「不滿」と「満足」とは自覺認識の問題で、意思の強弱に關係することが甚だ大なるは勿論である故に物資の不足に對し意思の強固なるものは「不滿」を感じないだし、意思の薄弱な者は不滿を感じて所謂グチをこぼすこととなるだし、此の點を表現せんとして「足りない、足りる」との文句となつたものであると思ふ、心すべきは表現の仕方、文句の用法であると繰り返し／＼考へざるゝ所である。

集會

部落會、町内會、隣組會曰く何會曰く何會合と随分集會が多い是れでは戦力増強も何もあつたものでない、集會集會又集會、集會に明けて集會に暮るるのでは職業に従事するの時間が不足する。戦力増強を目的とするも而かも其の期待に反くことが少なくない、何とか集會是正の途はなきものにや。

勝利への大礎石

五月二十一日聯合艦隊司令長官山本五十六海軍大將は本年四月最前線に於いて全般作戦指揮中敵と交戦、飛行機上にて壯烈なる戦死を遂げたる旨の大本營發表は霹靂の如く一億國民の耳朵を撲つた、畏くも天皇陛下におかせられては其の多年の勳功を嘉みせられ大勳位功一級に叙せられ元帥府に列し特に元帥の稱號を賜

つた正三位に敘せられ國葬を賜ふ旨の御沙汰あらせられ、武人として至高至大の榮譽たると同時に大御心の程恐懼感激に堪へない次第である。

出てゝは艦隊司令長官として旗艦の司令塔に立ち、入りては謀を帷幄の内に運らす、味方に取っては最も頼もしく、敵に取つては怖るべき武人で我邦として良き提督であつた。大東亞戰終後以來布哇マライ沖海戦の驚天動地の作戦には其の神算鬼謀は世界を驚かすものがあつた。「明察果斷大勇猛極まりなきは勿論天稟の上に永年修練の功を積んだものであらうが又親から受けつゝいた忠魂の發露だ、將に典型的の忠誠の人だ」と米内光政海軍大將は斷言せられた。實に忠誠にして勇猛果斷籌策に絶妙の才あると共に烈々たる敢闘精神を持つた武人であつた、今や其の戦死を聞き吾人は痛惜極る所を知らないものである。日本海軍の指導部が機械の様に組織化されて居ることは他國の作戦部以上で個々の人間は、例令畜世の偉材、無類の戰術家たる山本提督を喪ふことに依つて左程の影響を持つて居ないものだとも米國の新聞記者は論ずる所あるも吾人は信ず、山本元帥の戦死が唯一一片の痛恨事に終らず、必ず皇軍勝利への一路を固める一大礎石たるべきものであると。

× × × × × × × ×